会報
44号

れきふう

函館の歴史的風土を守る会会報
No.44　H 5. 7. 1
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町４３－９
五稜郭タワー株式会社内
電話 (0138)51－4785
印刷所　双葉印刷 電話 53－7730番

新年度をむかえて

会長　浜　島　国四郎

① 始めに

わが歴風会も発足以来15年になり、その運営がマンネリ化しているのでは、会独自では何をやっているのか、役員だけでやっているのではないか、と言った批判等もあるやに聞き、昨年全会員を対象にアンケート調査をしました。結果は会報42号でお知らせした通りです。

大勢として「従来通り総会で決めた大綱に従って運営委員会の合議で活動する。」でした。

しかし、今度の総会でも指摘されたことですが、問題によってはもっと会員の直接参加、意見を積極的に呼びかけるべきものもあるのでは、といった事は考えさせられました。

何れにしても、その都度皆さんに声をかける必要性は充分に認めても現実的に難しい点もあり、差し当たっては、会員の皆さんには報道機関によるニュースなどにご留意いただき、又、事務局、役員なりに率直な声を寄せて頂ければと思います。この事は会に対する関心の掘り起こしにもなります。

② 当面の目標について

歴風会は、十数余年間一貫して町並みの保存・整備促進に取り組んで居ります。市も西部地区歴史的景観条例の施行、さらにはここを拠点としての函館市景観条例制定に向けて目下検討を進めています。

こうした中にあって、西部地区の方々、特に脚光を浴びている歴史的な建物の所有者には日常生活の中で不便や迷惑に耐え、その維持管理に心労を重ねている方々のあることを思う時、胸が痛むばかりです。

歴風会では、こうした気持ちの一端として、歴風文化賞を贈り顕彰し、あるいはチャリティー益金は町並み基金のために積みあげてきました。昨年、市内の志を同じくする８団体と「函館の町並みを考える会」を作り市の町並み基金を応援することで、こうした方々に対しささやか乍ら資金の足しになればと願っているところです。

こうした考えから、今年度の歴風会の活動目標の一つとして函館西部地区歴史的町並み基金への支援を取り上げたところです。

③ 学習会等の目標

（ここでは文化財を建築物に限ります。）

函館には国の文化財（３件）道の文化財（６件）市の文化財（１件）とそれぞれ指定された物があります。函館の宝物です。

これらは函館らしいといわれる函館市民の生活の中で蓄積されて来た歴史的文化遺産の一部です。先に西部地区歴史的景観形成地域・伝建地区といった指定をしたことでも推測されるように、函館の歴史的・文化的遺産は点としてよりも線であり面的に在るということです。こうした歴史的・文化的遺産が指定文化財でないという理由で不当な取扱を受けないように、これらの現場から「学び、知らせ、守り」且つ「活かす」歴風会の運動を展開してゆきたいと思います。又、歴史的・文化的遺産の単なる外形の形姿に止まらず、長い歴史の中で培われた、内なる力の引き出し方をも含めてすすめたい‥‥と。

昨年度、幾度か役員会席上でも検討事項になっていた「指定建築物保存会」の皆さんからのお話しを聞く会を何んとか実現させたいものです。所有者の方々と僅かでもご苦労を分かちあい、当会として所有者の方々へどんなお手伝いができるか‥‥をあわせて考えてゆきたいと思います。

④ そ の 他

a 例年の行事・催事になっているものは個々工夫しながら進めます。
旧ロシア領事館、ウォーターフロント整備についても機会を見て勉強会を持ちたいと思います。

b 故会田金吾さんの貴重な遺稿があります。これを今年度中に発刊し、同氏の遺業を讃えたいと思っています。

c 町並み研修旅行：秋田での研修を計画します。
みんなで一緒の楽しい旅を期待しています。
是非ご参加を!!

d 会員の拡大：一人でも多くの仲間を
立場・考え方を越え、函館大好き人間の集まりで函館らしさを守り育てるためにも一人でも多くお誘いください。

みんなでまもろう 歴史的な建造物

――函館市西部地区歴史的町並み基金を設置しました――

函館市都市景観課長　宇都宮　幸　雄

函館の歴史的風土を守る会の皆様には、日頃から西部地区の町並み保全などにご尽力をいただき、厚くお礼を申し上げます。この度、町並み基金を設置しましたので概略説明いたします。

◎ 基金設置の目標

西部地区の歴史的な景観を、まもり・そだて・さらに良好なものへとつくり上げるために、昭和63年４月「函館市西部地区歴史的景観条例」を制定し、必要な施策に取り組んでおります。

この中で、歴史的な指定建造物等123件を対象として、外観を修理する場合に補助金で対応しておりますが、この指定建造物等は、明治・大正・昭和の初期に建築されたもので、冬期間における居住性能の改善や、日常的な維持管理に係る経済的負担の軽減を図ることが、課題となっておりました。

このことから、指定建造物等を市民共有の財産として、市民と行政が一体となって、さらに良好な状態で後世に引き継いでいくため、平成５年３月「函館市西部地区歴史的町並み基金の設置および管理に関する条例」を制定いたしました。

◎ 基本方針

◆基金の造成について

施策を有効に推進するために、広く市民の方々などのご寄付を募りながら、平成４年度から10年間にわたり、７億円の積み立てを目標とします。

（函館市の積立金　　５億円
　市民等からの寄付金　２億円）

◆基金の運用について

積み立てされた基金の益金によって補助事業等を実施します。また、基金の益金の運用等にあたっては、学識経験者・市民団体の代表・指定建造物等の所有者の方などからなる、運営委員会のご意見を聴きながら進めることとしております。

◎ 基金による施策

◆指定建造物等の防寒改修に要する経費に対する補助

指定建造物等の内、木造の住宅・店舗等の居住性能を改善するための、防寒改修事業に対する補助を行います。＜事業費の4/5以内で、160万円以内＞

◆指定建造物等の維持管理に要する経費に対する補助

指定建造物等の日常的な管理・小破修繕等に対応し、適性に維持するための経費として、毎年一定の金額を補助します。＜年額　６万円＞

◆指定建造物等の取得をするための融資に対する利子補給

指定建造物等をまもるために、金融機関から融資を受けて取得する場合、借入金の利子に対し利子補給を行います。＜３千万円以内で市長が定める利率＞

基金の設立までには、歴風会の皆様から、町並み保全推進のためとして度々ご寄付をいただいたところでございますが、基金の趣旨にご賛同いただき、今後ともより一層のご支援をお願いいたします。

なお基金の運用につき、市民団体の代表といたしまして、浜島会長にご参加いただいております。

町並み基金へのお問い合わせは

函館市西部地区歴史的町並み基金事務局

〒040 函館市東雲町４番13号　TEL 21－3389
（函館市　都市建設部都市景観課　景観保全係内）

西部地区の町並みイメージ

レトロ電車復元

（8月1日から 西部地区を運行）

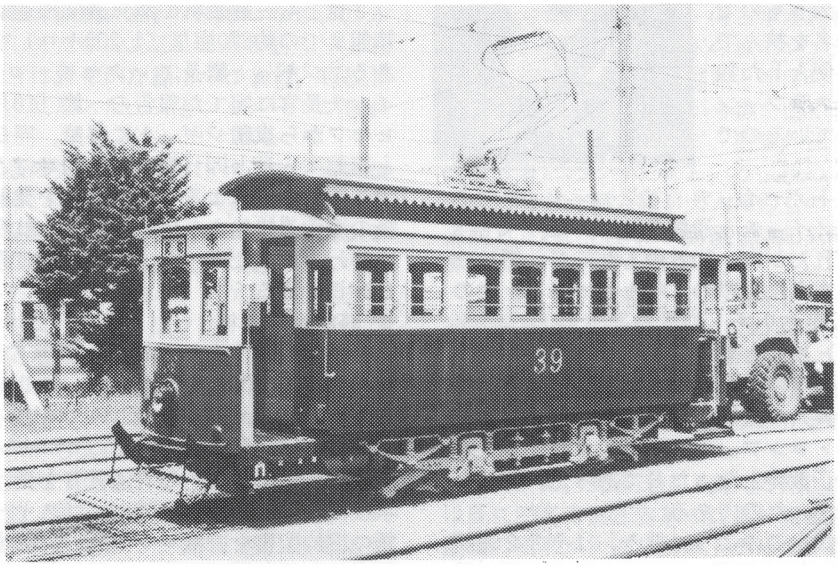
チンチン電車を走らせよう会
事務局員　石　井　　満

'93年８月１日から、いよいよ復元電車が運行され、西部地区を走ることになります。

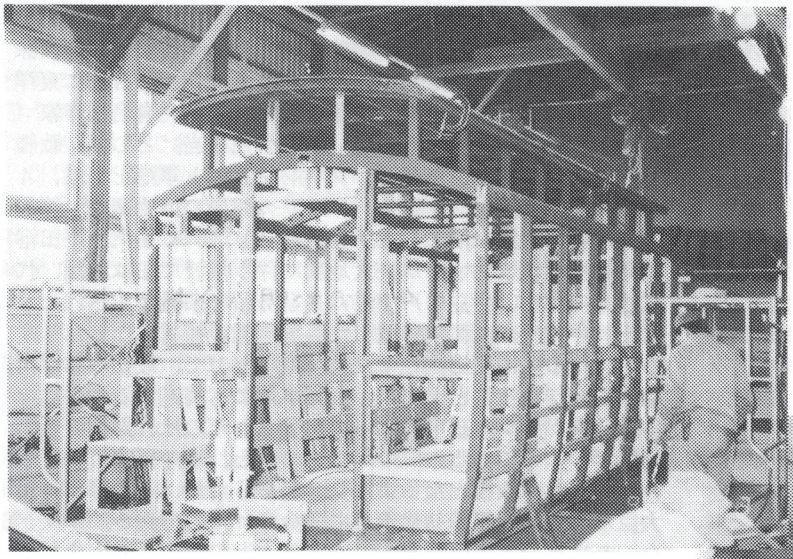
多くの人の様々な思いが込められた待ちに待った瞬間です。

明治43年に製造され、車体が木製、台車は米国のブルーム社製で狭軌では日本最古のものです。当初、千葉県の成田市で走っていたものすが、大正７年（1918年）に当時の函館水電㈱が、成田電気鉄道㈱から購入した５輌のうちの１輌です。

大正15年（1926年）の新川車庫の火災や昭和９年（1934年）の大火等により、仲間の車輌が次々と姿を消していった中で、この電車は幸いにも難をのがれて、市民の足として長い間走り続けてきました。



苗穂札幌交通機械株式会社で復元されたスマートな姿


材質はかつてのと多少ちがっていますが、
手法は往時の技術を踏襲したとのことです。

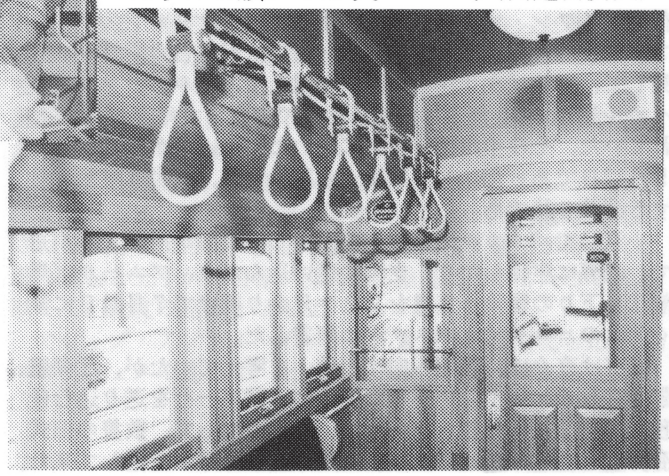
チンチン電車を走らせよう会は、太平洋戦争前後の一時期、男性に代わって、函館の路面電車の運転士や車掌として青春時代を過ごしてきた女性たちや、町並み保存運動に携わっている人達によって、昭和63年７月17日に設立されました。

その後は、復元資金を集めるため、記念乗車券、テレホンカード、その他の物品を販売するなど運動をしてきました。しかし3,６００万円という復元資金には到底満たないけれども、約750 万円を行政に寄付し、最終的には行政の力も借り、市政施行70周年記念事業として、平成4.５年度に復元されることになったものです。

昔の女性運転士、高島会長のもと、本当に70才を越える女性達が、かつての自分の青春の一ページを永久に記録に残したいとの意気込みを軸とし、全会員が力を合わせて５年間、強力な運動を続けた成果です。

「チンチン電車を走らせよう会」は、電車の永久動態保存のため、これからも運動を継続するのは勿論ですが、将来は会を発展させて函館ナショナルトラストを結成したいとも考えています。

歴史的な町並み、景観を買いとりこれを永久に保存する運動であるナショナルトラストにも、ぜひご理解とご協力をいただき、そして、一人でも多く会員になっていただけますようにお願いします。　（当会運営委員）



初代ロシヤ領事夫人　エリザウェタ

元 函館ハリストス正教会司祭　厨川　勇

◆ 長い新婚旅行

結婚前のフルネームは、エリザウェタ・ステファノウナ・パフシュテインである。彼女は未亡人で、先夫は陸軍少佐で、パフシュテインと言う姓の人であった。ステファノウナは、ロシヤ国有の父称と云うもので、人名と家名との間に父の名を挟んで、同姓同名を区別するのに便とした独特のものである。即ち父ステファンの娘であることを表示しているのである。

領事はイオシフ・アントノーイッチ・ゴシケーイッチであるが、オシップ・アントノイッチと通称されていた。

どのような経緯で結ばれたかは、知る由もないが、婚約は1858（我が安政５、史上有名な大獄の）年１月である。主の洗礼祭（神現祭と呼ばれるキリストの受洗記念祭日・カトリックでは公現祭と言う）当日と想像される。と言うのは、この婚約の日に、ゴシケーイッチの名著・和魯通言比考（最初に発刊された日露大辞典）の共同著者である橘耕斎が洗礼を受けて、ウラジーミル・ヨシフォーイッチ・ヤマートフというロシヤ人らしい名の正教徒となった日であった。洗礼を受領するのに最適の日であったのである。

婚配（正教会では結婚式をこのように言う）はその２週間後であった、と思われる。（この期間、その由を聖堂の扉に掲示して、異議の無いことを確認する）場所は白ロシヤ（今、ベラルーシと言われている）のモギレフ市の聖堂であった。モギレフは、日本の大主教・聖ニコライの故郷スモレンスクから、南西・直距離で函館・札幌間ぐらいの処、エリザウェタの先夫パフシュテイン少佐の勤務していた処でもある。

その１ケ月後の３月上旬には、サンクトペトロブルグから陸路、日本に向けて赴任の旅に出発する。

露土戦争の影響があったのだろう。軍用の船舶が世界一周とも言われる太平洋に向かうことを止めていたので、領事は六等文官（武官では陸・海軍大佐）として、実態は判らないが駅馬馬券と訳されているものと、馬六等分の旅費を受ける。

一行は、領事夫妻と夫人の連れ子ウラジーミル（12歳位）、医官ミハイルアルブレフト夫婦、以下単身の、武官パウェル・ナジーモフ、書記官ウェ・ディェ・オワンデール、領事館付司祭イワン・マホフ、聖堂誦経者ウィッサリオン・サルトフ、その他使用人男女合わせて一行15人が６台の駅馬車に分乗して、当時「ウラル（山脈）を越えて、イルクーツク（バイカル湖畔）に、無事に着くことができたら大幸運。」と言われていた、そのイルクーツクに着いたのは、２ケ月半を経た５月17日であった。前半は凍土の荒れた道、後半は車軸も没する泥濘の路であった。

小汽船でバイカル湖を横切り、怪しい筏師が操船する川舟で、浅瀬に座礁したり、支流に迷い込んだり、アムール（黒龍江）下りの冒険と焦慮を又２ケ月余り続けて７月21日に漸く河口のニコライエフスク港に到着した。

領事は直ぐに、箱館へ向け出航！と考えていたが、江湖艦隊長官カザケーイッチ少将摩下には、領事一行を送り込む任務に適当な船は一隻もなかった。９月になって、数隻の旧式海防艦と軽巡洋艦（クリッペル）ジギット号が入港して来た。ジギッドは新鋭艦ではあるが、将官室や客室などの設備などの無い、純戦闘用の小艦である。客室設備のある商船徴用の御用船のナヒーモフ号と２隻で戦隊を組み、領事の隷下に置き、箱館に向かうこととなる。２隻はサハリン対岸のデ・カストリ港で載炭など航海準備を整え、10月22日午後６時、折柄の荒天後の強風に乗って、箱館に向け出帆した。

２隻とも三檣装帆の蒸気機関推進螺旋を備えた高速船で、箱館までの約670海里（1,200キロ）を40時間で航海したのである。ジギット艦長アレクセイ・コルニーロフがガザケーイッチ長官に宛てた報告の一節「10月24日午前10時、領事ナヒモフから旗艦ジギットに移乗、同日正午、我が艦隊は堂々と箱館に入港、即日領事が箱館奉行と第１回会談の為、上陸する前に規定による７発の礼砲を発射した。」斯くて、50年後の青函連絡船より優速の壮快な航海で７ケ月半の新婚旅行は終わったのであった。露暦は12日遅れだから、現暦では11月５日である。

◆ 箱館生活６年

焦慮と無聊の入りまじった長旅の間、新しい夫から彼の辿った過去を聞かされたのは、エリサウェタにとって救いでもあり、又それ以上の楽しみでもあった。

領事は1814年、白ロシヤのゴシキノと言う寒村で生まれた。聖職をつとめる父から普通教育を受け、20歳でミンスクの神学校に入学、卒業と同時にパブスキー長司祭の許で、ユダヤ語の旧約聖書を直接ロシヤ語に翻訳する仕事に携わる。1839年末から10年間。北京の宣教師団に派遣され、聖職兼研究者として、東洋の史学・語学、更に博物学・天文学・技芸に亘る勉強を重ね、研究結果の論文・標本を本国に送って高い評価を得ていたことを聞き、博物に興味のある彼女は深い興味を感じる。帰国して２年後、日本との国交開始を目的に東洋に派遣されるプチャーチン提督の幕僚に任命、有名な作家ゴンチャローフと共に、八等官（海軍少佐相当）として、戦艦パルラダに乗り1852年10月、クロンシタット軍港を出港、４年間に亘る海上生活を送る。アフリカ西岸の博物調査、箱館・長崎等に寄港、沿海洲で新鋭戦艦ディアナに移乗、下田港で条約締結に成功するが、大地震に伴う津波で船は沈没、代艦建造のため、伊豆の戸田港に長期滞留を余儀なくされたり、露土戦争でトルコ側に参戦した英国軍艦の捕虜になったりするが、その間に密出国させた橘耕斎の協力で、最初の和露大辞典を著作することが出来、東洋事情にも精進することになる。辞典がロシヤ政府によって出版されたのは、帰国の翌年1857年のことである。この年の始めから、東洋研究で著名のカザン大学の教授となるより交渉があったが、年の暮に外務大臣に招かれ駐箱館初代領事に任命されたのである。エリザウェタは自分と価値観を同じくする人との新生活に大きな希望と歓びを感じた。

領事を迎える箱館は、竹内保徳・村垣範正・津田正路の３名が奉行として在任、前年に修好通商条約が批准されたのに、極めて不用意で取り敢えず日連宗の実行寺に一行を迎え入れた。領事と医師の二家族は寺の客殿、庫裡の一部に宿泊し、単身者は船から艀で通勤することになる。最初の冬は此の状態で過ごすのであった。夫人の苦労は想像に余りある。領事は『大工町上の地、東西四十間、南北五十間の敷地を都合せり。日本政府からの伺意が来るまでに領事館に必要な家屋を建てることを予承諾する。』と奉行宛の書類を発出して、融

雪を待って工事に着手した。

場所は現在の聖堂境内で、正門から直ぐに５、６段上がった右側の緩い傾斜地に、領事館本館、官舎、単身者の宿舎、客用の宿舎、診療所、洗濯場、深井戸などが急テンポで造られた。その忙しい中をエリザウェタは奉行の要請に応じて、半年遅れて着任した英国領事を迎える集会に饗應する料理の指導をする。

更に１年後の1860年（万延元）年には聖堂の建築が始まり、軍艦の艦長以下乗組員が馴れない日本人の大工・左官などの先に立って、建築の仕事に従事する。エリザウェタが中心になって、聖堂内の調度品や装飾が出来上がって行く。＜日本でキリスト教徒が追放されて依頼、221年を経たのち、日本の聖堂建立に全員が参加してたのである。５月が近づくと箱館の風景は一変した。山々は鮮やかな緑につつまれ、将校集会所にも花が飾られるようになった。＞とコルニーロフ艦長は彼の日記に記している。

この年、若いイワン司祭の父、ワシリイ・マーホフ長司祭が来函、父・子併任となる。また誦経者ウィッサリオン・サルトフが、６個の聖鐘をリズムと旋律とハーモニーを聞かせて打つ。ガンガン寺の名の由来となる。聖堂に勤めるこの人たちは三人とも独身だから、衣食にはエリザウェタの厄介になったであろう。イワン神父は病弱、ワシリイ神父は老体なので、早くも帰国を願い出るが、イワンは父の助けを得て、離日前に「ルスカヤ・アズブカ（ロシヤのイロハ）を出版する。後任のニコライ（後の聖人・日本の大主教）が着任したのは、翌年1861（万延２年から文久に変わった）年６月である。更に次の年には、横山松三郎に日本で初めての洋画（水彩・油彩）を教えた画報員（現在のカメラマンのような）レイマンが、続いて博物学者マキシモーイッチ（須川長之助を初めは助手として、自身の帰国後は独自の採集学者として育てた。）が、箱館に来る。みな独身者ばかりだから、エリザウェタの世話になる人達ばかりである。

夫人はマキシモーイッチの指導もあったと思うが、昆虫の採集に務め、彼女の名の付けられた＜エリザはんみよう＞と言う新種を発見、標本を本国に送るという研究を残し得たのは大きな欣びであったろう。

併行して診療所は病院（俗称ロシヤ病院）に拡張されて、入院患者も扱うようになったので、患者の栄養を考慮した食事に付いても、指導の任に当たらなければならない。過労の結果であろう、病気がちとなり、1864（文久が元治に変わった）年の秋、永眠する。

国の方針で、江戸に公使を置かず、箱館領事を唯一の外交機関としていたので、全権を有する外交官として６回も江戸に行き幕府と直接に折衝している。時は恰も勤王だ、佐幕だ、と国内が騒然としている時に乗じ、英・佛・蘭・米の諸国は、利権を追及、侵略的な行動に走る中にあって、『ロシヤだけは、これらの国々が、あれやこれやの方法で、日本国民の民族的尊厳を侮辱しようとする企てには加わらなかった。』と《ゴシケーイッチの生涯・白ロシヤのオデッセイ》の著者ヴィタリ・グザーノフは、強い文調で記している。

ロシヤ艦隊の乗組員の一人の手記は「２月１日、箱館で領事の居館、秘書官と武官カステロフ大尉、医官の居宅が焼けた。火元は領事館の隣りのイギリス領事館だった。」と書いて、領事の身辺に起こった異変を記している火災の損害は大きく、領事館内に避難する余地はなく、チャーターしていた露米会社の商船に移乗して、五等官（陸海軍将官相当）に昇任、帰国することに成っていた領事は、この船で箱館を去ったのであった。時に1865（慶応元）年であった。

◆ 永眠後50年

ゴシケーイッチが建立した函館聖堂は、ガンガン寺の綽名で住民に親しまれて来たが、1907（明治40）年８月25日の大火で類焼してしまった。46年前、24歳の青年修道司祭として、赴任した聖堂の焼失は、此時日本の大主教となったニコライにとって、痛恨の事でロシヤの各方面に復興の募金を依頼したが、５年後の２月16日に彼が永眠するまでには報いられることなく、1913年秋になって、アナスタシヤ・シネリニコーワと言う富豪の未亡人から45,000千ルーブリの醵金が届けられた。

翌年早春から整地工事が始まった。当時、旧制中学校５年生であった、後の民族・考古学者馬場脩は『この時、旧聖堂の焼跡からパン焼カマドの様にレンガを積んだ跡から白骨が出て』続けて『教会が露館と呼ばれていた明治20年代の古い信徒の間に、初代領事が令嬢を亡くした際、函館中の呉服屋から黒布を全部買占めて、聖堂外部全面に張りめぐらして、式後貧者にわけ与えたという伝説めいた話が伝わっていたが、共に出てきた婦人靴が大人用のものであったので、令嬢説は疑問とされ、白骨は山背沿（現船見町）のロシヤ人墓地に移葬された。』と記している。

次いで、馬場氏は、この事を1970（昭和45）年頃、駐札ソ連総領事バンドウラに、この話をして調査を依頼した処、『ゴ領事は、ザハレービチ生まれの陸軍少佐未亡人エリザウェタ・バフンテイン夫人と結婚した。二人の間に子供はなかった。函館滞在中の1864年に死亡した。』との書面が届けられた。

終わりに、馬場氏は『夫人の死亡前には、ロシヤ人墓地には既に23名の露国海軍の兵員が埋められて、現在のロシヤ人墓地の輪郭が大部分出来上がっていたにもかかわらず、此所には葬らずに、特に聖堂の一隅に埋葬したのは、領事の夫人に対する限りない愛着の念によったものであろう。』と記し、『然し夫人白骨改葬の際、立ち会った人々も既に物故してその跡は今日迄皆目解らない状態にある。』と結んでいる。

◆ 更に年を経て

馬場脩氏の「函館外人墓地」は1975（昭和50）年の出版で、その２年前から墓碑銘の翻訳を仰せつかった。勿論ロシヤ人墓地のである。その間に一つの事に気付いた。ロシヤ国が建碑した28墓の内、26墓は墓域を南北に分ける中央に設けられた路の西側に３列に配置されている。すべて海軍艦艇の乗員即軍籍にあるものの墓碑である。東側にある２墓は医師と聖堂の誦経者即文民の墓碑である。領事夫人の白骨を改葬したのは、モイセイ白岩神父である。ニコライが東京に開いた７年制の神学校出身で、1917年から函館教会にロシヤ語の夜学を開講、又同年から道庁立の函館商業学校でロシヤ語を教えた人である。当然墓碑銘を読破して、軍籍に在った者と文民とを道の東西に分けて配置されていた事に、気付いていたに相違ない。さすれば、白骨を改葬する地点は医師ウエスリ、誦経者サルトフの墓に続く場所に限定される、と推測できる。然し、推測では馬場氏に語られない。

15年が経過した。札幌で永眠したニコライ・シャルフェフ信徒を葬るに、遺族の希望で遺体は函館ロシヤ人墓地に埋葬されることとなった。前記の推測地点に続く場所が掘られた。掘り進むと上手から白骨が現れた。推測は的中したのである。欺くて、此度の建碑となった。

オシップ・アントノーイッチよ、貴兄が心残りだった愛妻エリザウェタの墓には、永く花々が献げられるであろう。

（札幌市在住）

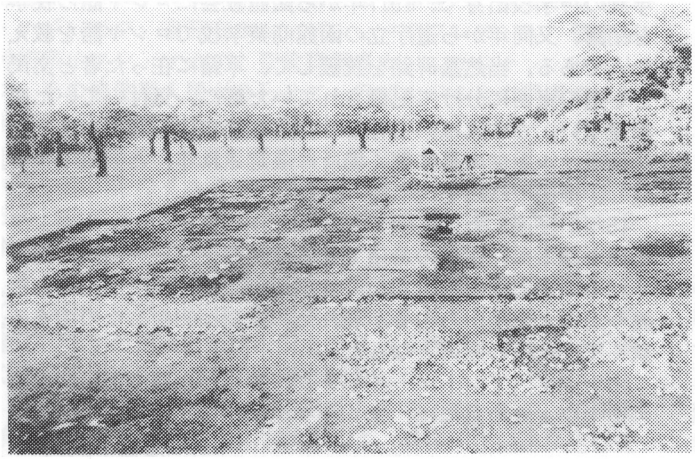
五稜郭の発掘調査

市立博物館学芸員　田　原　良　信

幕末から明治維新にかけて、蝦夷地の中心的役割を果たした五稜郭跡は、土塁・石垣・水堀などに往時の姿を偲ばせていますが、郭内にはかつて倉庫であった兵糧庫や各所にそびえ立つ松の木が残る程度となっています。

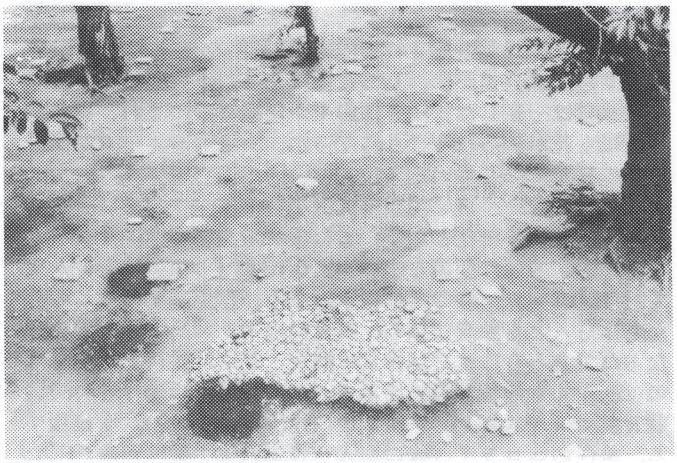
五稜郭内の箱館奉行所は、元治元年(1864)に完成し業務が開始され、４年後の慶応４年(1868)には明治新政府へ引き継がれ、箱館戦争の舞台となった後、明治４年(1871)郭内建物のほとんどが解体されて、大正３年から現在みるような公園・広場へと移り変わりました。その後、昭和27年に国の特別史跡として指定されて、その都度保存のための整備が行われ、外観はほぼ当時の姿をとどめていますが、郭内はただ公園としての広場のままの状態となっていました。そこで、この未整備状態にある五稜郭跡に存在していた、箱館奉行所庁舎および附属の建物などの復元整備を目的に、昭和60年度から平成元年度にかけて函館市教育委員会の手で、建物遺構の確認発掘調査が実施される運びになりました。

調査にあたって、現在に残されている五稜郭の平面図などを手掛かりに、箱館奉行所庁舎や附属棟などのおおよその位置を特定することにしました。これをもとに初年度は、奉行の家臣の長屋や板蔵を探り当てることができ、ほぼ平面図が正確であることに確信が持てたために、２年目からはいよいよ奉行所庁舎の調査を開始しました。建物の本体が存在した場所は、よく小学校の運動会などでグラウンドとして利用した所にあたり、ここをひたすら掘り下げることにしました。



奉行所庁舎跡の検出状況

（郭内の中央部に広がっていた奉行所庁舎の建物基礎部分です。）



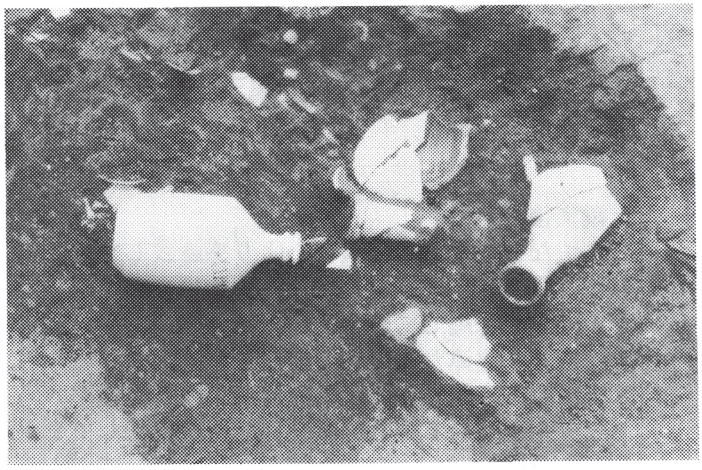
附属棟〔御備厩跡〕の検出状況

（郭内北西側に存在した厩跡で、
礎石の列が規則的に配置しています。）

そうすると地表から約20cm下では、小石の集まりや扁平な河原石および上面を平に加工した切石などが各所に見られるようになりました。これが建物の基礎にあたるもので、平面図の位置と照合すると、切石は建物の柱を受ける礎石で、河原石は各部屋の床下の束石に相当し、また小石の集まりは礎石などを固定するための割栗石であることがわかりました。これらの石はそれぞれ３尺・６尺・９尺間隔などに並ぶという規則性があり、各部屋や廊下および縁などの区画が、記録した縮尺図面上で再現でき、平面図に記されたそれぞれの位置とほとんどの部分で一致しました。特に、平面図で砂利敷と記されている白洲・訴所などにあたる所では、４～５cm程の平らな玉石が大量に敷詰められているのが確認されるなど、ほとんど平面図に忠実に造られていたことを知ることができました。次に、奉行所の周辺に配置されている各附属棟についても、調査が困難な数棟を除き、それぞれ平面図に記された規模の建物跡の基礎部分を探り当てることができました。この中で、厩（うまや）や長屋さらには板蔵など、各々の建物の造り方には違いがみられ、種類により基礎部分の石材などを変えていることもわかりました。また、建物に接続する板塀・裏板打柵矢来と記されている所でも、一定の間隔に卵形の穴が並ぶのが板塀跡

で、溝状に直線的に掘られているのが柵跡に相当するなど、基礎の造り方に大きな違いが認められました。なお、この板塀や柵跡を探っているうちに、郭内の各所に残る松の木のほとんどが、奉行所庁舎や附属棟の各建物の庭木として板塀・柵に沿った状態で、外庭や中庭に植樹されたものであることが明らかとなりました。さらに、亀田川から取水し、木樋を引いて堀や郭内などに給水していた上水道跡の存在も確かめられました。郭内には掘り抜きの井戸も存在していましたが、大半の生活用水はこの木樋による上水道に頼っていたようで、平面図に示されたルートにほぼ沿って配置し、それぞれの末端には溜桝（ためます）も設けられていました。このうちの数個所からは、ほとんど腐食せず当時の原形を保った木樋が出土したことから、上水道の構造や規模などを詳しく知ることができました。

ところで、郭内に位置した各建物跡の周辺には、かなり広い範囲に屋根瓦片が分布していたことから、奉行所庁舎および附属棟のほとんどが瓦葺きの屋根であったことが推定され、その多くが能登を中心とする北陸地方産のものであることを確認することができました。また、生活の様子を示す道具類も、各所から大量に発見されています。中でも、陶磁器類は量も多く、また種類も豊富であり、ある程度まとまった範囲から集中的に出土しています。この産地は、肥前・瀬戸美濃・信楽を中心とする関西方面などで、湯飲碗や土瓶さらには水滴といった役所としての必需品や、徳利・皿・盃・鍋・壺・甕・スリ鉢・火入・灯明皿など各種のものがあり、特異なものとしては、ヨーロッパへの輸出品であったコンプラ瓶や蝦夷地で最初に製作された陶磁器の箱館焼なども発見されています。この他に、鉄・銅製の釘・銭類に混じって箱館戦争時と推定される様式銃弾・砲弾片、さらにはヨーロッパ産のガラス瓶も出土しています。



生活用具類の出土状況

（肥前・瀬戸美濃・信楽などの陶磁器類が大量に出土しています。）

なお、これらの道具類が特に集中して発見されたのは、大きな2箇所のごみ捨て場からですが、実はこのごみ捨て場の位置などから面白い事実がわかってきました。それは、奉行所時代のごみ捨て場が、郭内の周囲に巡っている土塁へ登る坂の下へもぐり込んでいることが明らかとなったことで、このことから当時は土塁へ登る坂が存在しなかった可能性が出てきました。また、これと別な坂の近くでも、附属棟が解体された後に、どうも大砲の車輪がつけた轍（わだち）と思われる2本の溝が坂に向かって延びているのが見つかりました。この轍跡はおそらく箱館戦争時のものとみられ、やはり土塁の坂が五稜郭築造当初からあったものでなく、明治2年初め頃に榎本武揚率いる旧幕府脱走軍が戦闘のために急造したとしか考えられない状況にあります。そうすると、五稜郭築造当初の奉行所時代には、土塁の上には大砲の装備がほとんどなかった可能性もでてきました。もしそうであれば、明治元年10月26日の脱走軍五稜郭無血占拠という出来事は、五稜郭内には大砲などの戦う術を持たなかった箱館府兵が抵抗せずに撤退した結果であったことが想像されます。

土塁の坂へ延びる2本の轍跡

（附属棟の建物を解体後につけられた車輪の跡と思われます。）

いずれにしても、奉行所庁舎および附属棟のおおよそについては明らかとなった訳ですが、まだ五稜郭全体の中では不明な点も多くあります。このため、今年度から再び郭内の各箇所において調査を行い、知られざる五稜郭の姿をより一層明らかにして行く予定でいます。そして、この調査が終了次第に機会を改めて、五稜郭について紹介してみたいと思います。

はこだて史譚
―会田金吾・郷土史論集―の経過報告

歴風会　落合治彦

昨年７月、75才で亡くなった、当会前顧問の会田金吾氏の遺稿集をまとめ、今年７月の一周忌に捧げて遺徳を偲びたいと云う計画が持ち上がったのは同10月頃だったと思います。

初盆に御参りした会員が「函館、技術職の一端」と「函館に残る煉瓦工場」の二編の原稿を会田夫人より託されたことが、そもそもの発端でした。

運営委員会で編集担当者の一人に私が選出された時「追悼号」はこの二編を中心とし、今迄未発表のものを収録して、追悼文を幾人かにお願いすれば出来そうだと云う安易な気持ちが心の隅にあったことは確かです。

ところがいざ、編集を進めてみると、膨大な遺稿の量であることが判明しました。

特に会田氏が生前、自分でまとめ製本していた、「**はこだて史譚**」には多くの未発表のものがありました。到底、予定した一冊には納まらず、急遽、運営委員会に追悼号と遺稿集を分割したい由をはかり、了承をえました。追悼号は『**追悼－会田金吾氏を偲んで**』と題し、遺稿集は『**はこだて史譚－会田金吾郷土史論集**』とし、今迄活字にならなかったものを主に収録しました。追悼号の作業は終了しましたが、現在遺稿集の初校を継続中です。

事務局だより……

☆５月13日　第13回ふるさと写生公募展、諸手続き完了。

☆５月21日　函館市文化団体協議会臨時役員会及び総会がハーバービューホテルで開催、役員会に工藤事務局長が出席、総会に田尻副会長、佐々木・加賀谷運営委員、工藤事務局長が出席、総会終了後の懇親会にも出席しました。

☆６月３日　日本弁護士連合会第36回人権擁護大会シンポジウム第２分科会実行委員会委員寺田武彦、中島晃、中井康之の三氏が来函。当会と「まちづくり（都市計画）問題」について懇談をしたいとの要望があり、当日浜島会長、田尻副会長、工藤事務局長と上記三氏と五稜郭タワーで約２時間半懇談致しました。

☆６月５日　平成５年度定期総会開催（東邦生命ビル）平成４年度事業報告、決算報告、監査報告、平成５年度事業計画案、予算案及びチャリティーパーティー益金の使途等について承認、決議をいただきました。会長各位からご意見が出されました。今後会の運営に取り入れて参ります。なお、総会に先だち“都市景観の形成について”と題し宇都宮幸雄氏（函館市都市建設部都市景観課長）の講演をいただきました。西部地域だけでなく、函館市の都市景観が将来どう形成されるべきか等内容の濃いお話でした。

☆旧北海道庁函館支庁庁舎の復元工事も順調に進んでおります。先にご案内ご協力をお願いしております、同庁舎の絵葉書写真集の頒布についてご支援をお願いいたします。
頒布価格１組 500円　事務局まで申し出下さい。

＝名著ご案内＝

「北海道における初期洋風建築」
越野　武　著（北大教授）

函館の洋風建築導入時代の初期、開拓使函館支庁時代等の洋風建築が数多く紹介されています。文明開化の息吹とたくましいエネルギーが傳ってきます。

北海道大学図書刊行会発行（9,２７０円）

「東京再発見」
伊東　孝　著（東京の橋研究会代表）

都市景観のシンボルでもある橋などの土木遺産が日本の近代化のまぎれもない語り部であることが書かれています。読み易くたのしい本です。この本を通し是非、函館再発見を試みてください。

岩波新著　（５８０円）

＝全国町並みゼミ開催のお知らせ＝

８月21日・22日・23日　武州（埼玉県）川越で行われます。蔵の街であると共に15世紀以来の歴史的都市でもあります。参加希望者は57－2200番田尻まで。

＝編集後記＝

ご多忙な皆様からの玉稿、心より感謝致します。殊にご高令且つ病後、日末だ浅い厨川さんへ原稿をお願いし恐縮しております。然し厨川さんならではの興味津津たる函館の歴史をおきかせ下さり本当に嬉しく思います。田原学芸員のサスペンスドラマを思わせる調査結果、完結編を期待してます。会員の皆様、「町並み基金へ」、そして「チンチン電車の会へ」更なるご協力を‥‥。　田尻